

放送人の会

No・24

2005・9・21

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax 03-3221-0019 Email info@hosojin.com

代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

05年夏〜秋

日韓中テレビ制作者フォーラムへ 大山勝美

「やあ、ポスター届きましたよ」TBSの玄関前で、MBSの榎本恒幸東京支社長から声をかけられた。総選挙の翌日、局には小泉ハリケーンの余波がただよっている。

十月二十一日からの第5回「日韓中テレビ制作者フォーラム」のポスターはB2版でかなり大きい。「家族」が太陽を背に、屈託なく笑っている写真が印象的である。

本番にむけて着々と準備は進んでいる。山田尚、磯村健二、鈴木典之、寒河江正、長沼士郎、川口健一といった委員を中心に数十名の方々が残暑の中を汗を流して下さっていて、ただ



《写真は「人気番組メモリー」の観客》

ただ頭の下がる思いである。

日本側の参加番組も決まった。NHK、民放キー局、地方局と、それぞれ力作揃いである。韓国・中国からも次々と番組が送られてきた。村上雅通委員が、これらのソフトを熊本で翻訳し言葉をかぶせる作業を一手にひきうけて下さった。これも感謝のほかはない。

皆さんが黙々と積極的にフォーラムの準備に取り組んでおられるのも「政冷経熱」といわれる日中・日韓の関係の中で、テレビ番組を通じて三ヶ国が話し合うことが、何よりの「文化交流」、「文化外交」になると、その意義深さを強く感じているからだと思う。

この夏、会では二つの催しを行った。七月二日（土）、立教大学で公開シンポジウム「放送の公共性とは〜ホリエモンの問いかけたもの〜」を開いた。フジテレビとライブドアのニッポン放送株をめぐる争いで問い直されてきたテーマである。

司会（今野勉）のさばきもよかったが、「公共性」にさまざまな受け止め方があることが判った。送り手側か受け手側かによっても見方は変わってくるのだ。

正面きったテーマのシンポジウムに人が集まるかと心配されたが、中高校と学生を中心に二百五十名が集まり、場内発言者が後をたたく、予定を一時以上延ばしたほどであった。

テレビへの注文、不満、抗議、質問が相次ぎ、どこか危機的状況にある日本の放送に何か言いたい一般の人がいかに多いかを実感したのである。

このような市民参加のカレントシンポジウムは、これからもタイミングをみて積極的に開いてゆくべきだろう。

八月二十八日（日）、横浜情文ホールで、第3回人気番組メモリーとしてNHKの「英語でしゃべらナイト」をとりあげた。言葉による異文化コミュニケーションの新しい種の教養娯楽番組である。丸山俊一プロデューサー、松本和也アナウンサーに青木裕子アナが司会というシンプルなメンバーで、客の出席が懸念されたが、超満員の盛況であった。

松本アナの軽妙なトークと裏話の面白さに場内は拍手と笑い声が絶えなかった。「人気番組メモリー」も、時折り現在放送中の番組を取りあげるべきではないかとの貴重な示唆をうけたのである。

ともあれ、秋のハイライトは十月の「日韓中テレビ制作者フォーラム」である。会員の方々が一人でも多く、参加し、国際会議を盛り上げていただきたいと心から願っている。

公開シンポジウム

「放送の公共性とは何か」

ホリエモンの問いかけたもの

事業委員長 今野勉

日時・7月2日(土)午後2時〜4時

半

場所・立教大学

パネリスト

寫 信彦(ジャーナリスト)

服部孝章(立教大学教授)

重村 一(スカイパーフェクトTV

社長)

田中早苗(BPO副委員長・弁護士)

司会・今野勉(放送人の会)

協力・立教大学、文化パステル

シンポジウムの趣旨

(PR用チラシから)

「ニッポン放送株の取得をめぐるライブドアとフジテレビの争いは一応の決着をみました。しかし、その間に投げかけられた「放送の公共性」とは何かという課題は課題のままです。この際、あらためて腰をすえて考えてみませんか、「放送の公共性」とは何か。」

*

ホリエモンことライブドア社長堀江貴文氏が、インターネットと放送の融合を目的に、フジテレビの経営参加をめざし、フジテレビの株式上の親会

社であるニッポン放送の株式取得に動き出し、社会の耳目を集めた。

堀江氏の企業買収の究極の目的が自社の利益のみであって、放送という企業のもつ公共性に何ら顧慮していないことに、ニッポン放送はフジテレビをはじめとして各方面から非難の声があがった。

それに対して、民放が今さら放送の公共性などを持ち出すのは、これまでの娯楽一辺倒、視聴率第一主義にほのかむりするものだという論議がなされた。

いったい、放送の公共性とは何なのか。この際、きちんと話しあってみる必要があるのではないか、との声が放送人の会でもあがり、当シンポジウムが企画された。

パネリストは前記の四人をお願いすることにし、立教大学の協力で会場を同大学の大教室を借りることとなった。

緊要の課題とはいえ、一般の人にはやや関心がうすいのではないかと危惧され、集客の心配もあったので、放送人の会としてはできる限りの機会をとらえてPRにつとめた結果、当日の会場には2百人を超える聴衆が詰めかけ超満員となった。

折りしも、六月三十日、政府の規制改革・民間開放推進会議が、七月に予定されている中間報告で、「公共放送のあり方(ニッポン放送の受信制度の見直し)」を盛りこむことが報じられた。

電波をスクランブル化し、受信料を支払った世帯にのみ電波が届くようにするシステムを取り入れてはどうかという提言である。

一方、そもそも放送法は民間放送に公共性など求めていないのではないか、という指摘もなされた。

また、放送法の枠内にありながら電氣通信法の下で、通信として番組を放映しているスカイパーフェクトTVなどのCS放送においては、公共性などはとくに問題にもされていない、という現実をどう考えるべきなのか、という声もあがった。

ひと口に、放送の公共性といっても、放送や通信をとりまく状況は、急速に変化している。現状をふまえて未来を見通す「放送の公共性」論は成立するのか、司会者たる私も、手探り状態の司会となった。

四人のパネリストによる多岐にわたる複雑な論調の展開を要領よくまとめるのは私の力にあまる。

ここでは、私の印象を記すことでご容赦いただく。

寫信彦さんは、ジャーナリストとして、堀江さんの行動には否定的で、放送は報道機関として、権力と闘う態度を失ってはならないとし、明快に放送の公共性を指摘した。

重村一さんは、パーフェクトTVの社長として、自分は放送人と呼ばれることに違和感があると、ソフト産業をビジネスとしてどう成立させるか

という視点から発言した。

弁護士の中早苗さんは、BPO(放送倫理・番組向上機構)副委員長として、マジョリティー(多数者)の利益のための放送は、公共工事的な発想であって、それは放送の公共性ではない。放送の公共性とは、マイノリティー(少数者)の利益のためにあるのだということ、多様な言論を保証することが、真の公共性だという前提で、論を展開した。

マスコミ法専攻の立教大教授服部孝章さんは、民放のゴールデン・タイムがバラエティー番組の葬列であり、同時時間帯にあるテレビ局がドキュメント番組を放送すると決まった時、ライバル局の幹部が、視聴率競争の上で自局が勝つから大歓迎と発言したという例を挙げて、パブリック・サービス精神のない民放の現状を痛烈に批判した。

シンポジウムの最後は、会場の参加者からの熱心な発言が相次ぎ、放送の現状に対する一般の人の関心の高さをうかがわせた。その意味でも当シンポジウムの価値はあったものとしよう。

「日韓中テレビ制作者フォーラム」は各国協賛者による非公開イベントです。参加希望の会員は、事務局まで申し込みください。定員を考慮し、余裕分として考慮します。

公開トークショー

「人気番組メモリー」第3回

英語でしゃべらナイト

日時・8月28日(日)午後1時半〜

4時半

場所・横浜情文ホール

司会 青木裕子(NHKチーフアナ、

会員)

ゲスト 松本和也アナ(NHK)

松本俊一(NHK番組制作局

チーフ・プロデューサー)

「小川宏ショー」「欽ちゃんのドンとやってみよう」に続く三回目。今回は現在放送中の番組をとりあげた。

「超人気タレント登場の後なのでちよつとビビった」と松本Pは言ったが、現役番組の人気は流石で、会場は中学生を含む現在の視聴者で満員。パトリック、釈の人気タレントは登壇しなかったが、松本アナのトークは会場を大爆笑の渦に巻き込み、一人で充分欽ちゃんに対抗できるお笑いタレントの才能を披露した。

「君、英語は?」「受験英語はやりました」「英会話話?」「自信がありません」「パーフェクトだ」。

上司とのこの対話で松本アナの「英語でしゃべらナイト」の起用が決まった、と松本アナは言い、会場を笑わせた。英会話ができない日本人の典型を地のままでやることになった松本アナの苦闘が始まる。

来日した映画スター、歌手、スポーツ選手などへの松本アナの突撃インタビューはこの番組の人気コーナーであることはご存知だろう。

ボブ・サップへのインタビューを命じられた(こうした任務のことを「コマンド」と呼んでいる)松本アナは「あなたは野獣(beat)と呼ばれるが、あなたと野獣の違いは?」とやつと質問する(勿論英語で)。ボブ・サップは「おれは生肉(meat raw)は食べない」と答える。ところが、「どうだった?」のスタッフの質問に松本アナは「ミートローフは食べないってさ」と答える。意地悪なスタッフはこんなへまを見逃さない。ぱつちり収録して放送してしまう。

短く編集されたNG特集の紹介に会場は大爆笑の連続であった。

へま、ドジ、の繰り返しに松本アナはめげない。「母国語じゃないから、英語は下手でもしょうがない。間違えるのも仕方がない。要は何かを伝えようとする志です。その志を掴むための番組としてみてください。」「ほんとうに英会話が上手になりましたら、別の番組の方がいい。この番組は異文化コミュニケーションの楽しさを伝え、そのきっかけを作るためのものです」のコメントが印象的だった。

これから英語だけでなく世界の多くの言葉、異文化と交流する番組を作りたいとの意欲を語っていた。

松本アナへの最初のコマンドは六本木の外人パブでのショーに出演し、笑いをとることだった。松本アナは「私は日本の学校で英語を学びました」と言い、「I am a boy, you are a girl. What's your name?」と外人客に向かって話しかけ、外人客の一人が自分の名前を言うと「Me too」と言って笑いをとった。これは有名な森ジョークを単純にしたものだ。

森ジョークとは…
森総理がクリントン大統領と会うことになった。英語が苦手な森総理に秘書が最初の挨拶を教えた。「まずHow are you?と言います。相手はI'm fine, and you?と言うのでMe tooと言います」と教えた。会見の場で森総理はまず間違えてWho are you?と言った。クリントンは驚いたがジョークで返事することにしてI'm a husband of Hirarie Clinton と答えた。森総理は即座にMe tooと言った。クリントンはますます驚いてWho are you?と聞いた。森総理は今度は一生懸命考えてI am ソーリ と答えた。

【新刊書紹介】

『夜明け時代のTVプロデューサー』

佐々木 欽三(会員)

OBになつて得意分野(例えばドラマやドキュメンタリー)の現場半生をテレビ史に交錯させつつまとめる放送人の著作は多い。佐々木さんは違う。NHKに入局して、東北生まれが東京を迂回していきなり鳥取放送局。

ラジオの時代に「地方に塩漬けになる恐怖」を背にして次第に放送とは何かを会得してゆく。そして「東京(総局)のテレビ文化に何を託すか、その足跡を自分史の視野からほぐして行く後半。一気に読ませる魅力ある、謙虚かつユーモアにみちた、類本にはない、たくみな文体の書である。

(悠飛社 一、六〇〇円)

『老いをはしゃぐ』

天野 進平

かつて雑誌「放送文化」の名編集長だった著者が不治の病を掌に折に触れて「死」と「生」の対話を断章ふうに綴った書で、いわば平成の世の「徒然草」か。この書は老いは楽しい式をよくある随筆集とはちがう。

「お迎えがきたら、笑って杖を死出のタラップにつこう。そのとき『いい人生だった』などとキザなことは言わないつもりだ。(中略)もうひとつ、キザなセリフ『どうか管を抜け』もよそう」。

「死」と仲良しになった老人が精神の散策としてメモした下界評論である。

(新風社 一、一〇〇円)

むかし戦争をやった頃、日本中にはやっていたことばは、「戦い抜くぞ勝つまでは」とか「七生報国」とか勇ましいことばだった。

この頃ではそんな勇ましいことばの代わりに、優雅なことばがはやって

いる。
七月の末、九州から北海道へと仕事が続いた時、左の肋骨の下がうずき始めた。不安になって土地の医院に行ってみると、「これは内臓ヘルペスだ」といわれた。

そして、「何年か前にウイルス性の病気をやったことがありませんか？」とおっしゃる。

「え？あ、あります。でももう五十年以上前ですよ。」

「そうそう、それですよ！」

「でも私がかかったのは一九四七年、つまり昭和二十二年ですよ！」

日本人最後の現役兵は五カ月で終わった。そして私は大学に進んだ。

大学に入って早々、左肋骨下がピリピリと痛んだ。

学校の帰りに行った東大病院は、診察では何も分からなかった。「入院してみますか？」「お願いします。」

かくして私は同時に東大と東大病院の二つの施設に入ることになった。

戦後の東大病院はゴタゴタしていた。夜消燈になると暗闇の中で患者たちの唸り声や悲鳴がとどろいた。

私の隣のベッドでは脳腫瘍の手術をすませたばかりの若者がいて一晩う

なりつつづけていた。

四晩すぎて、院長に「よく分からぬ。退院してもらえないか」と言わ

れた。何が何だか分からぬうちに退院した。

その話をすると、現在の医師は、大きくうなずいた。

「それですよ。ウイルス性の炎症だったのに、体力があったから、自然に治癒したのです。でもウイルスは死なずに残ったわけです。そして六十年たっ

てあなたが老化したのを見て、猛然と暴れ始めたのです。」

びつくりした。六十年も人のハラワタに住みついで、宿主の体力の衰えをじ

つと待つなんて！

私には動き始めたウイルスが曾我兄弟のように思えてきた。その執念に拍

手したくなつたのである。

「地方の時代」映像祭開幕！

今年の大賞は熊本放送「井上家の裁判」

二五周年を迎えた「地方の時代」

映像祭は、今年も十月一日(土)午後

一時から川越市の東京国際大学キャ

ンパスで開幕される。

最初に上映される今年の大賞(グラ

ンプリ)は、熊本放送の「井上家の裁

判」に決まった。プロデューサー村上

雅通(会員)、ディレクター薛(せつ)

力夫。日本に永住帰国したもの、苦

難のなかで国と闘い続ける中国残留

孤児家族を描いた秀作。

放送局部門の優秀賞は、浅草レッサ

ーパンダ帽事件を通して知的障害者

の現実を異色の方法論で描いた「ある

出所者の軌跡」(北海道文化放送)、遺

伝子組換えをめぐる波紋を描いた「大

地の選択」(札幌テレビ)、倒木被害に

あつた夫婦を通して国の山林政策の

無策さをシャープな映像で描いた「山

が死んだ」(山陽放送、プロデューサ

ー・会員曾根英二)、米軍が撮影した

沖縄戦フィルムに登場する人々たちを

探し証言を撮った「むかし むかし

この島で」(沖縄テレビ)、自衛隊誘致

をめぐる住民と行政の騒動を追っ

た「消えた自衛隊誘致」(琉球放送)

の五作品に贈られ、特別賞は「沖縄

よみがえる戦場」(NHK沖縄)が選

ばれた。

いずれもテレビマンの存在感を示す

見ごたえのあるドキュメンタリーで

ある。

市民自治体CATV部門では、武蔵

野美術大の女子学生・大田綾演出の

「花のこえ」、高校生部門では尼崎小

田高校放送部制作の「打ちまーしよ

っ！」ほかの作品が入賞。

審査委員会推奨は、「男たちの綱取

り合戦」(山形めんこいテレビ)、「あ

なた また戦争ですよ」(山形放送)、「あ

有沙と私」(福井テレビ)の三作品

に決まった。

また今年、地域から戦後六十年を

考えるシンポジウムや、これまでの入

賞作品のなかから選ばれた五作品、

「わが故郷は消えても」(東海テレビ

八二年大賞)、「市長の発言」(長崎放

送八九年大賞)、「写真の中の水俣」(N

HK熊本)、「人間正岡子規・月給四

十円」(NHK松山)「川越82」(川

越市、岡本愛彦演出・自治体初受賞作

品)なども招待作品として上映される。

詳細はパンフレット(事務局に若干部

あり)または左記のホームページを

参照ください。

<http://www.tiu.ac.jp/eizosai>

第5回 日韓中テレビ制作者フォーラム IN東京

テーマ・「家族、その今」「共同制作への模索」

刺激ある交流を

放送人の会代表幹事 大山勝美

10月21日(金)から3日間にわたり第5回「日・韓・中テレビ制作者フォーラム・IN東京」が日本青年館で開かれる。韓国から26名、中国から27名、日本側約50名が集まる放送現場主体の大きかりな国際会議である。

■ 今回のフォーラムの柱は2本。

(1) 国情の違いはあれ、それぞれに共有するテーマ「家族」をめぐるシンポジウム。

(2) それを呼び水にして現場相互間で、あたためているさまざまなテーマを結集、より深化させるため「共同制作(合作)」の可能性を具体的に模索するフォーラムである。

率直に言って日韓、日中とも政治外交では逆風が吹いている。歴史認識、領土問題、小泉首相の靖国問題などがノドに刺さった小骨のようにひっかかっている。

「いや、だからこそ、かえってフォーラムの意義がある」「文化外交にもなる」と、個々の局、NHK・民放の組織と関連行政機関に協力を仰ぎ、協賛面では関連企業(例えば資生堂やソニーなど)にお願いし、結果われわれの

趣旨にたいして積極的な賛同をいただいた。

■ もともとはワールドカップの共同主催をきっかけに数名の日韓プロデューサーたちが膝を交えて話しこんだ小さな会合がはじまりであった。

03年の第3回大会(済州島)では、中国からのオブザーバー(15名)を招聘、私も招かれて参加した。会の最終日に今後は中国も正式メンバーに、との提案があり、昨年第4回フォーラムは中国の揚州市で開催され、一挙にスケールアップしたのである。

中国経済の急上昇もあり、日韓中の大衆文化、とくに音楽、ファッション、コミック、アニメなどの若者風俗と文化は共通の感覚をひるめつつある。

韓国は10年前に映像産業振興を国が支援し始めてからテレビ表現のレベルが飛躍的にアップしていった。スタッフ力も急成長し、「韓流ブーム」は一過性のもものでは決していない。

中国ではCCTVが15チャンネルを放送し、各省の放送局も元気があり、ドラマは年間1万5千本の提案の中から数千本を放送している。

韓国もそうだが、テレビの現場には憧れの職場として、有能な若い人たちが押しかけてきている。メディア間の熾烈な競争の中から、韓中2国は底知れぬパワーに満ちた表現力を身につけて

てきている。

■ しかしながら日本のテレビ界の現状はどうか。爛熟期に入ってしまったまま不祥事や諸矛盾が噴出し、メディアの役割や存在価値をめぐり、鋭く問い直しが迫られている。

いまや視聴者からの信頼回復こそが、日本のテレビ制作者たちへの緊急課題である。このようなとき、勢いのいい多才な韓国や中国の参加番組を見、制作者たちの発言に耳を傾け、論議を重ねることは日本の放送文化にとっていい刺激となり、なにより豊かな次世代を展望する番組開発に役立つと確信しているのである。

■ ところで、揚州大会で痛感したのは、三ヶ国にまたがる言葉の問題である。とくに韓国語・中国語間の通訳が不足し、つねに日本語を仲介する厄介さがあった。しかし今回の日本では妙手があった。

中国縁辺東北部の朝鮮人地区出身で現在日本在住の方々である。この人たちは日韓中三ヶ国語に通じている。大会では同時通訳以外に彼らに依頼して万全を期したいと考えている。

記者の皆様方にも是非ともご参加、取材していただきたく、ご検討していただければ幸いです。

日韓中3カ国のさまざまな課題の中で共通するのは、近代化に伴う成熟社会の過程で現れる諸問題、環境問題と並んで問われているのが「家族」のありかたであろう。都市と農村の生活格差（農村の僻地化、都市の核家族化と少子化社会）を生じ、家族崩壊の兆しがみえ、国家的課題となっている。国情の違いから対応する姿勢はさまざまだが、ソーシャル・イシューとして映像でメディアはどのようにとらえ、表現しているか。3カ国の作品を見比べた上で論議を重ねていく。

各国参加作品：

日本：（1）人間ドキュメント『野村萬斎～わが子を鍛える～狂言三代の初舞台』

（NHK制作 03年11月21日放送）

三代にわたる古典芸能の一家に熾烈な芸の道に挑む姿を描く。

（2）ドキュメンタリー『山小屋カレー』（CBC制作）

山小屋を営む90歳代の老夫婦のつつましい生活と登山者たちの交流から

老いに生きる姿を描いた作品。

（3）ドラマ『あいくるしい』（TBS制作）

祖父、両親とその子供たち7人家族が病いあつい母の死にたちあい、家族は
いかに生きるべきかを、美しい田園風景をバックに子供たちのビビッドな
友情をまじえ叙情豊かに描いた連続ドラマ。

（4）3カ国共同制作 『家族のカタチ』（テレビ西日本・PSB釜山放送・大連電
視台）。家族の絆をテーマに日韓中3カ国のさまざまな家族、家庭像を紹
介し、共通する問題や課題を出し合い、取材VTRを参考に考えあう。

韓国：（1）ドラマ『秋の洪所長』（SBS制作）53分

（2）ドキュメンタリー『四つの指で描く夢』（MBS制作）52分

（3）ドラマ『ずっと愛してる』（KBS制作）55分

共同制作：EBS+ABU 『もう恐くない、私の最後の思い出』57分

中国：（1）『神州大舞台』（ジャンル未確認）

（2）ドラマ『俺爹俺娘』（浙江省電視台）30分

（3）『婆々』（未確認）48分

共同制作：北京CCTV+KBS 『北京我的愛』90分

*なお、開催期間中に公開される日本側の参考作品。いずれも何らかの意味合いで「家族」にかかわるテーマ性の強い作品である。

1. 『電車男』（フジテレビ）ネット家族を連想する作品。
2. ザ・ノンフィクション『家族の愛と絆を求めて』
3. 『菊次郎とさき』（テレビ朝日）
4. 『アットホームダット』（関西テレビ）
5. 『ザ・ドキュメンタリー 貧乏サーファー一家放浪記』（テレビ東京）
6. 映像05～『ダウン症・家族の6年』（毎日放送）
7. パラエティール『1億人の大質問!?笑ってこらえて』（日本テレビ）
8. NHKスペシャル『大地の子を育てて』（NHK）
9. 日韓友情音楽祭（NHK）

これらの作品は、放送番組センターの協力により（横浜市日本大通り）にて一般視聴サービスを行っています。

第5回 日韓中テレビ制作者フォーラム in 東京

テーマ: (1) 家族~その今 (2) 共同制作への模索

日時: 2005年10月21日(金)~24日(月)

場所: 日本青年会館(神宮外苑 ☎03-3401-0101)

主催: 日韓中TV制作者フォーラム組織委員会

放送人の会 NPO放送批評懇談会

放送番組センター

韓国放送プロデューサー連合会

韓国放送人会

中国電視芸術家協会

於: 国際ホール (3F)

《フォーラム日程表》

◇ 10月21日(金)

18:00~19:00 開会式(司会 露木 茂 山本美希)

開会辞 大山勝美 組織委員長

歓迎辞 村上光一 大会名誉会長

経過報告 鄭 秀雄 常任委員

祝辞 日韓中 大会顧問 日本側 志賀信夫(NPO放送批評懇談会理事長)

参加辞 3ヶ国各1名

特別講演 辻井 喬(日中文化交流協会会長)

19:45~21:00

歓迎晚餐の宴

於: 宴会場(4F)

◇ 10月22日(土)

9:30~12:30 作品鑑賞(家族~その今) (2作品)

於: 各国語別会議室

(鑑賞後 制作者との質疑応答あり)

→: (昼食タイム)

13:30~15:00 作品鑑賞(家族 1作品)

於: 各国語別会議室

(鑑賞後 質疑応答あり)

15:00~15:50 全体会議(進行 日本側)

於: 国際ホール

(1) 各国放送事情(山田良明フジ常務) ほか

16:00~18:30

(2) 共同制作事例研究

日韓中作品紹介(VTR各10分程度)

(質疑応答 3CH通訳付き)

19:30~22:30 作品鑑賞(家族 2作品) 質疑応答

◇ 10月23日(日)

9:00~12:00 作品鑑賞(家族 2作品)

於: 各国語別会議室

10:30~12:00 シンポジウム(A)

於: 国際ホール

テーマ《人のつながりが作品を生み、交流を呼ぶ》

司会 今野 勉

パネリスト 鄭秀雄 村上雅通 中山和記(予定)

13:00~15:30 シンポジウム(2)

於: 国際ホール

テーマ《共同制作へ向けて》

司会 鄭秀雄(常任委員長)

パネリスト 各国1、2名 及び企画提案者2、3名

16:00~17:00

閉会式

於: 国際ホール

総合司会: 露木 茂 山本美希

総合評価 河野尚行(顧問)

韓中側各1名

原田豊彦(大会名誉会長) ほか

17:15~18:30

歓送宴会(司会 露木 山本)

於: 宴会場

各国諮問委員ほかスピーチ

◇ 10月24日(月)

9:00~ メディア関連見学コース NHK技術研究所及び(株)ソニー

15:00 前後に解散

* なお開催中、ゲスト国の制作者に取材要望の記者の皆様は予め事務局側にお申し出てください。事務局で手配いたします。

『日・韓・中 放送現場が集う』 『テレビ制作者フォーラム』成立史

実行委員 村上雅通
(熊本放送 報道制作局)

九州と韓国の放送番組制作者の交流会をやりましょう！」

韓国の映像作家 鄭秀雄(ヘチョン スーウン)さんが呼びかけた一言こそが5回に及ぶフォーラムのきっかけになったのです。鄭さんの発言が飛び出したのは、(財)放送文化基金の提唱で2000年3月、熊本市で開かれた九州地域「制作者フォーラム」でした。

実行委員長だった私は、撮影から編集まで一人でこなす鄭秀雄さんのなみなならぬバイタリティーを九州の制作者たちに紹介したいと思い、パネリストの一人としてご招待したのです。

実は、鄭さんと私は、その半年ほど前から「日韓交流」の青写真を描いておりました。鄭さんは「韓国にはプロデューサー連合会という組織があって、また、放送文化振興会からの資金援助も期待できる。日本側の体制さえ整えば、秋にも実施できる」と提案され、この段階で九州地区の制作者の集まりは、体制作りのきっかけともなりうる「絶好の機会」だったのです。

ところが、鄭さんの提案に対して会場からの反応は今ひとつでした。当時の九州経済は不況の真っ只中で、放送局の売上は落ち込み、ローカル民放の制

作者たちは日々の仕事に追われ、余裕すら無い状況だったのです。鄭さんと私の目論見は頓挫したかにみえました。ところが、半年後、鄭さんから思わぬ朗報が届きます。鄭さんの友人でNHK福岡の西世賢寿さんが一緒にやろうと名乗りをあげたのです。さらに、東京のNHK総局からは、

当時衛星放送の放送担当部長だった原田令嗣(現衆議院議員)さんも加わることになり、一方放送文化基金からの助成・援助も得られました。

提案から一年後、ようやく体制作りの第一歩がはじまったのです。それでも熱心な韓国側と日本側の意欲にはまだまだ温度差がありました。こうした状況から「組織の代表ではなく、個人の資格として参加する。手持ちの資金の範囲内で出来ることをやる」という共通認識が、実行委員会のメンバーに生まれてきたのです。

韓国側との話し合いの結果、第一回目の開催は、日韓の喜怒哀楽を投影する場所、日韓海峡を運航するフェリー船上で実地することになりました。当時は、歴史教科書や小泉首相の靖国神社参拝問題が噴出する一方で、翌年2002年には、サッカーワールドカップの日韓共同主催という日韓新時代の構築のきっかけになり得るイベントがひかえておりました。

「制作者の立場で歴史や両国の現状を率直に語り合えば必ずや今後の交流のヒントが見つかる。我々の手でワールドカップのテープカットをしよう！」こうして2001年11月18日、釜山を

出航するフェリーには、日本から50人、韓国から50人が乗り込みました。

NHKが『BSフォーラム』の収録をしたため、船内には番組用に立派なセットが作られました。プログラムは日韓それぞれの手作りで質素なものでした。船上でのスケジュールは、日韓のドキュメンタリスト6人によるディスカッションとその後の懇親会です。

乗り込む前、釜山市内で行われた「交流会」の余韻もあって、当初はなごやかな雰囲気でしたが、話題が歴史認識に及ぶと空気は一変しました。国益を優先する韓国側制作者と、あくまで個人の発想を中心に据える日本側制作者との論議は平行線のままだったのです。シンポジウムは3時間に及びましたが、結局、新時代のビジョンを描くには至りませんでした。

加えてVTRの作品上映もなく、その後の懇親会でも通訳の不足で意志の疎通を図る事もできませんでした。

翌年、二回目の開催地は対馬に決めました。対馬は、日韓の善隣友好の象徴的な存在「朝鮮通信使」ゆかりの地です。掲げたテーマは「21世紀日韓新通信使」。一回目の経験をふまえ、論議のかみ合うものになりました。

人数もそれぞれ25人に限定し、全員が参加するシンポジウムだけでなく、分科会に分かれた話し合いや通信使ゆかりの地の探訪、カラオケ大会など一回目にはなかったプログラムも取り入れられました。

対馬の人たちも裏方や通訳として参加し、制作者だけでなく地域を挙げて

交流が実現しました。フォーラムを立ちあげた目的の一つ、制作者同士の心の交流の道筋がようやく見えてきた、という思いでした。

事実、対馬でのフォーラムをきっかけに、日韓の交流を描いたドキュメンタリーが、日本から参加した制作者によって2本制作されたのです。

三回目は、中国からの参加者も加わり、韓国済州島で開催されました。

交流はもちろん、共同制作を本格的に取り上げたのは、この済州島からです。参加者たちの合言葉は「ハリウッドの植民地からの脱却」。3国が協力、切磋琢磨して、欧米にひけをとらない作品を送り出すための方策を論議しました。

語り尽くせなかった課題は、翌2004年中国・揚州で盛大にひきつがれ、今回の日本では、これまでの大局的な視点だけでなく、より具体的な企画にまで論議は及ぶことでした。

鄭秀雄さんは、我々制作者を「潤滑油」に譬えます。潤滑油があれば、止まった歯車も回り出します。まだまだ課題山積の日韓中ですが、今回のフォーラムが「潤滑油」の役割を果たすよう祈念しながら今、準備をすすめているところです。

お知らせ

記者の皆様で出席、取材される方々には、あらかじめ放送人の会事務局までご連絡ください。

☎ 3221 0019

放送人の証言 その11

上方発ドラマの達人たち

久野浩平

今回は大阪発テレビドラマの確立に尽くしたプロデューサー、ディレクター、の証言を集めてみました。

最初は吉村繁雄さんです。放送への吉村さんのかかわりは一九四三年、テレビの先駆者高柳健次郎博士に憧れて浜松工専 電機研究室に入學したときから始まりました。五一年、民放ラジオ開局直前のABC(朝日放送)にプロデューサー、ミキサーとして入社、五五年OTV(大阪放送)開局にあたっては準備委員として早い時期から参加します。番組開発やスタジオ設計、VTRの導入など多忙を極めた創業期をへて、話はずら演出した芸術祭参加作品「かんてき長屋」(57年)、「芽」(58年、ともに奨励賞受賞)についての思い出など、OTVの数少ない報告として吉村さんの「証言」は貴重です。

五九年六月OTVはABCと合併、吉村さんはABCに戻ります。ABC時代は制作部長、制作局長、として企画した数々の番組、松竹芸能、吉本興業との交渉、勝新太郎、藤山寛美など俳優の思い出を語り、中でも七五年、東京のキー局とのいわゆる「腸捻転」解消を制作局長として体験した秘話は興味を惹きます。その吉村さんから一言……

「(ラジオ・テレビは)全部技術革新によって進歩したメディアで、とにかく技術者の意見がものすごく強い。それを逆手にとり制作者として技術の人に

これでもできるやろ、こういうことはできないか、って利用したことです」

野添泰男さんは、女の園の宝塚歌劇団の演出助手から五五年開局前のOTVに入社しました。五八年から五九年にかけてOTVはABCと毎日放送に分裂したのですが、野添さんは同時期に新しく設立された関西テレビに移ります。野添さんの「証言」は関西テレビの歴史そのもので「どてらい男」「船場」などの人気番組のこと、花登 筐さんや数々の俳優の思い出、演出論、演技論などが語られます。

野添さんに限らず今回の大阪編の制作者たちの「証言」に共通するのは、東京キー局への対抗心です。東京に対して大阪独自のドラマの存在理由を確立するのが大きな主題でした。野添さんが選んだ方法は芸術祭に参加して賞を獲得すること。六〇年、野添さん演出、大島渚脚本の「青春の深き淵より」は芸術祭の大賞を受賞しました。

「大阪が自己主張するって言うのは、現場で作品を自己主張するしかない。それは今もこれからも変わらない(中略)ただ、ドラマであれトークであれ、人間が織りなしていく世界、それだけは、やっぱり大阪のものは大阪で作る意味合いは未来永劫にあると思う」

池田徹朗さんは五七年、新日本放送(現毎日放送)に入社。最初はラジオドラマのディレクターでした。OTVから分かれた毎日放送がテレビを開局したのが五九年、池田さんは六一年にテレビ制作に移ります。「証言」の中心は六五年、市川崑さんの指導下で演出した連続ドラマ「源氏物語」です。市川さ

んはこのドラマを抽象セットと白黒を際立たせる照明の映像美で作り上げ、毎日放送のスタッフに大きな影響を残しました。

「証言」はこのあと、福田恒存監修「テレビ文学館」芸術祭参加「ドラマ・テレビ局六九」ドキュメンタリー「仏法東漸」に続きますが、毎日放送の特性といえる芸術性、教養性の高さは、キー局に対する大阪局の風土的差別化の結果でもあったと池田さんは語ります。

こうした企画は、高橋信三社長の積極的な決断によるものでした。因にこの「放送人の証言」は、高橋信三放送文化基金(〇三年度)の助成を受けています。「大作主義っていうか、あの時期のテレビでの最高の贅沢だった。これから先ね、テレビジョンではもうやろうってことにはならんのではないか、とぼくは思うんですけれども……」

土居原作郎さんは、五七年NHK入局、直ちにBKに配属され、和田勉、前田達郎さんのアシスタントの後、六一年からディレクターとして「文芸劇場」「テレビ劇場」などを担当します。「テレビ小説」の歴史や分析、「甘口辛口」「流れ雲」「鮎の歌」「炎熱商人」など、自作の思い出、多数の作家や俳優のエピソードなど、土居原さんの「証言」は興味深い話題が尽きません。NHKでは珍しく最初から最後まで一度もBKから移動しなかったという経歴の持ち主です。芦屋出身の関西人としてBKには欠かさない人で、結果土居原さんの存在自体がBKドラマの歴史といえます。「他流試合をしに東京からやってきた連中は言うたら楽なわけで、純粋は大

阪ものやらんですむから。そやないと、自分も知らん大阪発ドラマ作らないかんみたいな(中略)あくまで精神が大阪的であるということは忘れんといて下さいといったようなことを言ったことがありますわ」

最後は、山内久司さんです。

山内さんは五五年、朝日放送に入社。十年間のラジオ制作を経て、六十五年、テレビに転じてプロデューサーとして「近鉄金曜劇場」を担当します。山内さんもまた東京キー局に対抗する方法に頭を悩ませます。最初試みたのは「助左エ門四代記」「戦国艶物語」など映画スターを集めた大作主義でした。その後、異能なホームドラマを求め、「月火水木金金金」や「お荷物小荷物」を作り、「テレビ論のドラマ」「脱ドラマ」と話題になります。そして闇にこだわる独自の映像美学はついに、テレビ映画の傑作「必殺シリーズ」を生んだのです。

「ホームドラマってのは、あの、元来東京のもんですが。大阪のホームドラマは石井ふく子さんのホームドラマにはならんのですよ(中略)。大阪ではね、ドラマは構築して行くもの。大阪で東京を舞台のドラマを作ってみても(大阪流に)構築してるんですよ」

「(京都の)映画界は優れた人がいるんですわ、長い伝統の中で。ただ無いのは悪く言ったら京都には現代がないんです。現代性をどこに吹き込むか。それはこっち(テレビ)の力なんです(中略)そやけど業(わざ)はテレビ局の人間は足元にもおよばんですわ、職人としてすごいんですわ、(京都の)映画人は」

ラジオの広場

編集・石井 彰

地方制作者の声に耳を傾けよう

地方のラジオ局を訪ねる旅を続けている。夏から初秋にかけ福井、北日本宮崎、FM福岡、信越各局をまわった。東京に比べ、あまりにも少ない予算・人員の中で、なんとか良いラジオ番組を作り続けようと悪戦苦闘している制作者に出会うたび、かえってこちらがはげまされる。彼らが現場で頑張るかぎり、ラジオはまだ大丈夫だと。今回は「ラジオが元気になる方法」について放送現場で活躍中の二人の本会々員にお願いした(石井彰)。

◇ 「いいものを作ること」

山梨放送ラジオ局長兼制作部長 児玉久男

制作現場の士気を低下させたら「ものづくり」は成り立たない。

ラジオへの逆風が吹き荒れる中で最後の砦とは、この一念だけである。

ラジオの経営効果が悪化する中で活性化への道筋を模索しているが、残念ながらカンフル剤は無い。地道に基盤を再整備し収支のバランスを図る、というのが当面の手立てである。収入が飛躍的に向上することは期待できず、従って支出を切り詰めていくことになるが、この際に切り捨ててはならないのが、ものづくりへの意欲である。

生番組であれ録音番組であれ制作者が一つの目標を設定して取り組み、完成した時の達成感は何物にも変え難い。

ものづくりはそもそも楽しいものである。こだわればこだわった分だけ喜びも大きくなる。喜び・楽しみのないところに活性化の芽はあるはずもない。作り手の目標はたった一つ「いい物(番組)を作ること」である。

ではいい番組とは? 評価の基準はいろいろあるが、山梨放送ラジオでは民放連盟賞番組コンクールを一つの物差しとしている。コンクールを目指すことで自己研鑽し、他社の作品を聴くことによって新たな発見を得、審査員の批評によって次に目指す目標を得てきた。幸運なことに、山梨放送ラジオはこれまで9年連続して連盟賞を受賞している。9年の間に優秀賞を15本、最優秀賞を2本獲得している。

コンクールの中で評価を得ることは制作者として大きな喜びであり、自信につながる。またタイトルホルダーとしての責任も生まれる。同僚にも刺激となり、連鎖反応で新たな賞獲得者を生んでいる。この活気が途絶えない限りやがてラジオ局全体が活性化する日が来ると信じている。

先日、テレビで某自動車メーカーの生き残り戦略を取り上げていた。このメーカーは唯一無二のエンジン開発に生き残りかけた。そのエンジンは職人の技術の結晶である。これが認められてこのメーカーは世界の中で注目を集めている。いまこのメーカーが必死に取り組んでいるのが、次世代への技術の伝承だという。苦しい時代こそ充実させることはどの世界でも確かな技術とものづくりの情熱であり、また人を育てることである。

MRT環境スペシャル
「みやざき川物語」
MRT宮崎放送ラジオ局長

湯浅和憲

わたしたちは平成16年4月から60分のレギュラー番組「みやざき川物語」(毎週日曜放送)をスタートさせました。この番組は県内のすべての河川とその流域の歴史、生活文化、自然環境などをみつめ、県民の川への想いをも一度取り戻す試みでした。番組の構成部分は4つ。「治水」と「利水」と「環境」、そして「流域の歴史・文化」です。河川リポーターが毎回県内の河川にでかけて、その流域の暮らしや河川の生の表情(治水の現状、川の流れ、野鳥の声、鮎釣り人、河川プール等)をリポートしました。その取材素材をスタジオに招いた各分野の専門家が詳しく解説します。

今年9月の台風14号の襲来で宮崎県では甚大な被害が発生し、改めて「治水」の重要性が浮き彫りになりました。番組では一年半の間に、「洪水」と「氾濫」と「水害」はどう違うのか、国土交通省の専門官から何度も「治水」に関するレクチャーを受けてきましたので、今回の災害放送で用語を誤ることなく被害状況や被害状況やその原因を伝えることができました。また断水や停電、道路の決壊・交通止めの状況を徹夜でタイムリッドに放送しました。現在でも給水や道路回復の情報を流しています。ラジオでしか情報を得られなかったリスナー(停電地区の人びと)からはMRTラジオに多くの感謝が寄せられております。

「歴史・文化」については、流域に伝わる伝説を発掘し、「川の昔物語」として8分間のミニドラマを制作しました。この中で今まで知らなかったことが沢山分かってきました。例えば西南戦争では大淀川の北側に陣を敷いていた西郷軍の桐野利秋が夜な夜な船で南岸に渡り、中村町の遊郭で豪遊していたこと、その遊郭が私の家の近くだったことなどを初めて知りました。また、昭和5年、種田山頭火が宮崎に来たとき大淀川にかかる高松橋を渡し賃3銭で渡り、生目神社に詣でたことも分かりました。「みやざき川物語」は県内の河川と流域の人びとの暮らしや歴史を振り返り、河川の役割と将来のあるべき姿を考える番組として始めたものですが、今回の台風襲来でその役割をある程度果たすこと(伝えること)は、私たちを取り巻く大きな自然を知ることでもありました。それは地域で生きる人びとの未来を考えることに繋がります。そしてそのことが「ラジオを聴く方々」に元気を与えることになると思います。私に思っています。なお、この「みやざき川物語」は平成17年九州・沖縄地区連盟賞ラジオ活動部門で最優秀賞を受賞しました。

ラジオがテレビの後に生まれていたらと思うときがある。そろそろ、テレビに飽きてきた二十世紀後半に生まれていたら小回りの効く知的なニューメディアとして……。

(佐々木欽三「夜明け時代のTVプロデューサー」より)

新短期連載

テレビ裏方のわが創世記

橋本 潔

1952年(昭和27年)図らずもNHKテレビ本放送以前のテレビ研究班に非常勤嘱託として入局することになった。21歳だった。しかし、このテレビとの突然の出会いには、私りの前段階がある。

戦後すぐ、京都での美術学生時代に日本画専攻のつもりが舞台照明の魅力にとりつかれ、まずの手始めとして宝塚歌劇大劇場に通う。照明設計スタッフのご好意で毎月、各組の舞台稽古に舞台での実際を教わり、やがて、日本最初のグランドバレエ「白鳥の湖」全幕・関西初演の照明助手を務めた。その頃、大阪朝日会館は新劇、バレエ、オペラ、会館能など関西での舞台文化の中心だった。関西新劇団合同公演「ロミオとジュリエット」土方与志・演出、吉田謙吉・舞台装置、穴沢喜美男・照明、での照明助手をはじめ、新協劇団、俳優座、文学座、劇団民芸の公演の照明助手となり、ときには関西の劇団、舞踊公演の照明プランを受け持った。当時この朝日会館では妹尾河童さん(のち舞台美術家・フジテレビ)がポスターデザインを描いていた。「ロミオとジュリエット」では松下朗さん(舞台美術家・フジテレビ)が美術助手だった。

朝日会館の4年の間に吉田謙吉、伊藤薫朔、松山崇、河野国夫という舞台美術家のすぐれた舞台に接し、舞台照明家穴沢喜美男の美しい色使い、篠木佐夫のほとんど色を使わない奥深い配光、舞台照明家のそれぞれの舞台への光の対応を目のあたりにした日々だった。

篠木佐夫さんのリアルな照明への驚きが映画照明への興味となった。舞台照明の機材不足を補うため、松竹下加茂撮影所でスポットライトを借用したことを機にして、撮影所で映画照明についての興味が湧いた。京都生まれの京都育ちなので映画のロケ風景は小さい頃からなじみのあるものだったが、実際の現場は想像以上にエキサイティングなもので、映画作りの現場の面白さは格別のものだった。舞台の合間は撮影所通いとなる。

映画照明は大汗をかく重労働ながら、フィルムエマルジョンの特性、レンズの選択と写角、絞りとフォーカス深度などを体で感得する。とくに試写室でのラッシュフィルムを見る時の期待と不安、この体験は得がたいものだった。この撮影所には映画美術デザイナーとして本木勇さん(もと新築地劇団)がおられて舞台美術や映画美術についても教えを受けた。このとき私以外に、同じ京都美術で「アトリエ座」のメンバーとして舞台美術を始めていた板坂晋治さん(NHK・BK、の

ち説売テレビ)、井川徳道さん(映画美術監督・近代映協(東映))も加わった。本木さんはこのとき溝口健二監督の「歌麿をめぐる五人の女」(女優・松井須磨子)の美術を受け持たれていた。この2作品の現場をつぶさに見る事が出来た。レビュー映画「満月城の歌合戦」はマキノ雅弘監督、美術は4年後にNHKテレビで再会することになる島公靖さんの数少ない映画美術デザイナーだった。島さんのセツトには床一面にガラススタイルが敷きつめられていた。重いライトで割れるガラス、アングルを変えることにライトが写りこみハレーションを起こすスタイルの処理に悩まされる、などありながらも実験的で斬新なデザインは京都の撮影所になかったもので印象に残った。

最近、放送人の会で「放送人の証言」としてTBSの坂上健司さん(美術)、NTVの石井康博さん(美術)、NHKの石川健次郎さん(技術)にそれぞれ開局当時からテレビとの係り合いを話していただき、あらためてテレビというメディアが姿をあらわす前後の混沌、混乱、予算不足、不眠不休などなど、さまざまなお話が出される。また、当時疑問だった事も時間とともに理解でき、平仄のあうことも数多くでてきた。そうして私の前段階がテレビ実験放送につながってゆく。

(以下次号)

兜虫

西川 章

NHKBSの「俳句王国」に出演しました。この番組はNHK松山放送局の制作で生放送でしたから、松山へ行って来ました。

前日に松山入りして、打合せとスタジオでのリハーサル、そして夜は食事会と、このあたりの丁寧さはさすがNHK。我々民放ならば全て当日の作業となるところで、生本番当日も勿論再度の打合せとカメリハがあります。またNHK松山のスタッフは我々素人の出演者がリラックスして句会に臨めるよう細やかに気を使ってくださいました。この番組が人気もあり長く続いている理由はこのあたりにあるのでしょう。

俳句は「兜虫」の兼題で一句、自由題で一句を出します。この兼題を知らされてしばらくした頃、我家の窓に裏山から兜虫が飛んできました。なんとという僥倖でしょう。その時の句を詠んで主権の大串章氏はじめ三人の方の票をいただきました。

兜虫よくぞ我家を選びたる
初めての街に既視感ソーダ水
熊蜂に包まれ愚陀佛庵閑か
壁面は総硝子張り月上る
氾濫を忘れたるかに水澄めり 阿舟

会員名簿 05・5・15現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
 石井清司 石井ふく子 石井彰
 石高健次 石橋冠 磯野恭子
 磯村健二 市岡康子 一色伸夫
 伊藤雅浩 井上欣也 井上良介
 岩澤敏 岩下恒夫 (う) 上田千秋
 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭
 生方恵一 浦田彰 (え) 江口展之
 遠藤利男 遠藤ふき子
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類 啓 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 小川秀夫 沖野瞭 荻野慶人
 小田昭太郎 小田久栄門 (か)
 加賀美幸子 各務孝 片岡敬司
 片島紀男 勝部領樹 加藤滋紀
 加藤静夫 金沢敏子 兼蔵正英
 金平茂紀 加納孝夫 上安平冽子
 鴨下信一 河合 肇 川口和久
 川口健一 川口幹夫 川竹和夫
 川平朝清 河邑厚徳 河村正一
 (き) 岸田功 北川泰三 北川信
 北出晃 北村美憲 北村充史
 木村栄文 木村成忠 木元教子 (く)
 楠美昌 工藤英博 国枝忠雄
- (こ) 小出五郎 児玉久男 児玉孝光
 後藤多聞 近藤晋 今野勉
 (さ) 斎藤伸久 斎藤守慶
 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正
 坂元良江 桜井均 桜井元雄
 迫田朋子 笹川紀久雄 佐々木欽三
 佐々木彰 佐藤年 佐藤利明
 沢口真生 澤田隆治 沢田隆三
 (し) 重延浩 静永純一 渋谷康生
 島地純 島野功緒 清水 満
 下川靖夫 下重暁子 習田豊
 城菊子 (す) 菅野高至 杉澤陽太郎
 杉田成道 鈴木昭典 鈴木道明
 鈴木紀郎 鈴木典之 須磨 章
 せんぼんよしこ (そ) 曾根英二
 (た) 高尾正克 高島秀之
 高橋一郎 高橋啓 高橋泰
 滝 大作 武谷雅博 田澤正稔
 只野哲 田中昭男 田原英二
 田原茂行 (ち) 千葉勉 (つ) 露木茂
 鶴橋康夫
 (と) 土居原作郎 戸田桂太
 外崎宏司 富永卓二
 土門正夫 (な) 中川幸美 中崎清栄
 中澤忠正 中島 僚 中田美知子
 中谷英世 中津川輝夫 長沼士朗
 中村敦夫 中村克史 中村季恵
 中村耕治 中村美美子 永守良孝
 難波秀哉 (に) 西川 章
- 新村もとを 西ヶ谷秀夫 丹羽美之
 (ね) 根津武夫 (の) 野崎茂
 野添泰男 野田宏一郎 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋口義春 橋本潔
 林勝彦 林健嗣 林裕史 原由美子
 原田庸之助 (ひ) 備前島文夫
 久野浩平 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男
 福田雅子 藤井深 藤井子ズ子
 藤代勝博 藤田晋也 藤久ミネ
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう
 (ま) 松浦幸一 松尾羊一
 松田輝雄 松平定知 松前洋一
 松本明 松本修 松本国昭 (み)
 三上義智 三国 章 水上毅
 水野憲一 満島保夫 三村景一
 三村千鶴 宮川鏡一 宮脇敏雄
 明神正 (む) 村上紘一 村上憲男
 村上雅通 村上佑二 村木良彦
 (め) 銘苅栄昌 (も) 桃井 章
 森川時久 諸橋毅一 (や) 矢島良彰
 数内広之 山泉昭彦 山崎隆保
 山崎 裕 山路冢子 山田良明
 山田 尚 大和定次 山名光紀
 山根基世 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢 彪
 横山英治 吉永春子 吉村直樹
 吉村誠 吉村光夫 (わ) 和田智允
 和田光弘
 佃由美子

新入会員紹介

◇ 嶋田 親一 放送批評懇談会理事

演劇協会理事

◇ 菱田 市彦 元TBS技術局長

◇ 木村 忠夫 元TBSカメラマン

◇ 大西 康司 南海放送報道制作

センター部長

◇ 小中 陽太郎 元NHK 作家

編集後記

秋号は記者発表資料の挟み込みも兼ねた「日韓中フォーラム」の事前記事特集としました。次回の冬号でフォーラムの全容をお知らせいたします。

さて、会員と事務局CM(無料) ← 斎明寺以玖子: ホン+C D

『幻想文学名作選』文豪の怪談』朗読 / 橋爪功 加藤剛 岸田今日子ほか。

CD10枚組 ◆定価 21,000円

日本音声保存 (☎ 03-681-0411 まで)

・ 小坂理沙子 : インターネット T V M A @ V i s i o n をチャット。

F M 「ヴァンソンのパプコヤタコ」内

〈小坂理沙子先生のSな日本語教室〉

の「パルコ」&「ELLE」の新プラン

ド」CM露出。ネ、聴いて! 編集部。